

2 食堂の歴史と既往の成果

(1) 薬師寺の創建と食堂の歴史

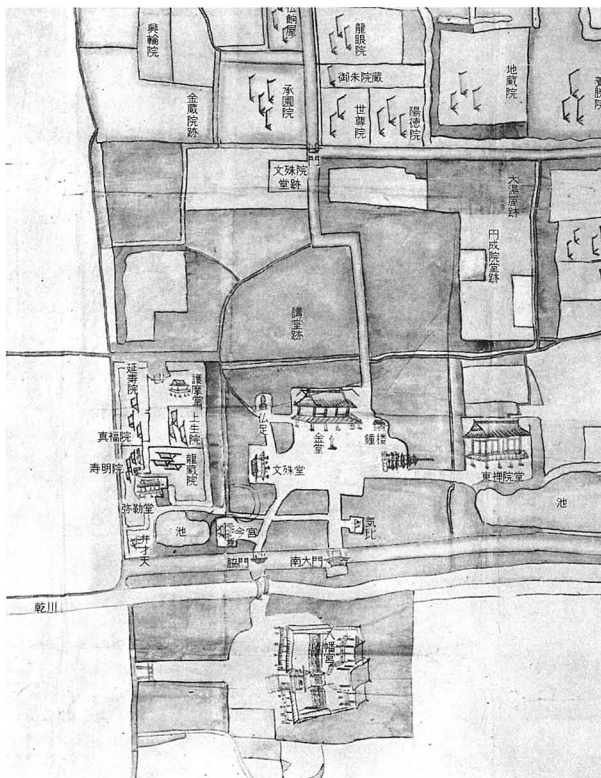
薬師寺 薬師寺は『日本書紀』によると、天武天皇9年(680)に天皇が皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒を祈願して発願した寺院とされる。これが藤原京の薬師寺であり、現在は本薬師寺と呼ばれ、橿原市城殿町に東西両塔および金堂の土壇を残す。その後、和銅3年(710)の平城遷都にともなうて薬師寺も平城京右京六条二坊に寺地を移し、以来現代まで法灯が受け継がれている。平城京の薬師寺造営に関しては、長和4年(1015)に撰述され、元弘3年(1333)に書写された薬師寺本『薬師寺縁起』(以下『縁起』と略す)に、養老2年(718)に伽藍を移すとの記載がある。しかし1977年の発掘調査で、東僧房北側の井戸より霊亀2年(716)の年紀のある木簡が本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土器などとともに出土したことから(『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所1987、以下『薬師寺報告』)造営自体はそれより以前には始まっていたらしい。堂塔の建立に関しては、東塔のみ記録があり、天平2年(730)に建立されたことが『七大寺年表』や『扶桑略記』などにみえる。

食堂 古代における食堂は、僧侶が一同に会して齋食をする建物である。食堂の実態は史料が乏しく、不明な点が多いが、そのほかにも、布薩に代表される仏教儀礼や、年中行事などがおこなわれ、僧侶の日常的活動を支えると同時に儀礼空間でもあったという(吉川真司2010「古代の食堂」『律令国家史論集』塙書房)。薬師寺食堂の造営年代に関しては不明だが、東塔の年代を手がかりにすると、おそくとも奈良時代前半には建てられたとみられる。

『縁起』には、「一、食堂一字九間四面、東屋、長十四丈、広五丈四尺五寸、柱高二丈五寸、前九間、後戸三間、左右脇門。」とある。この記述によると、食堂の規模は桁行11間、梁行4間で、寄棟造、

建物の大きさは桁行140尺、梁行54尺5寸とある。また、扉口は正面に9つ、背面に3つ、左右には脇門が1つずつあったと記されている。ただし、屋根の形や柱の高さに関する記述は、薬師寺本にのみみられ、建永2年(1207)の醍醐寺本『諸寺縁起集』や康永4年(1345)の護国寺本『諸寺縁起集』に収録された『薬師寺縁起』にはみられない。

この食堂は、天禄4年(973)に北方に隣接する十字廊より出火した火災により焼失した(『縁起』・『扶桑略記』)。この火災は、平城京の薬師寺にとって創建以来初めてとなる大規模な災害で、金堂と東西両塔以外の主要な伽藍のほとんどが焼失している。その後、食堂は寛弘2年(1005)に再建されたことが『縁起』にみえる。また、保延6年(1140)に大江親通によって編まれた『七大寺巡礼私記』によれば、「食堂一字九間四面瓦葺」とあり、『縁



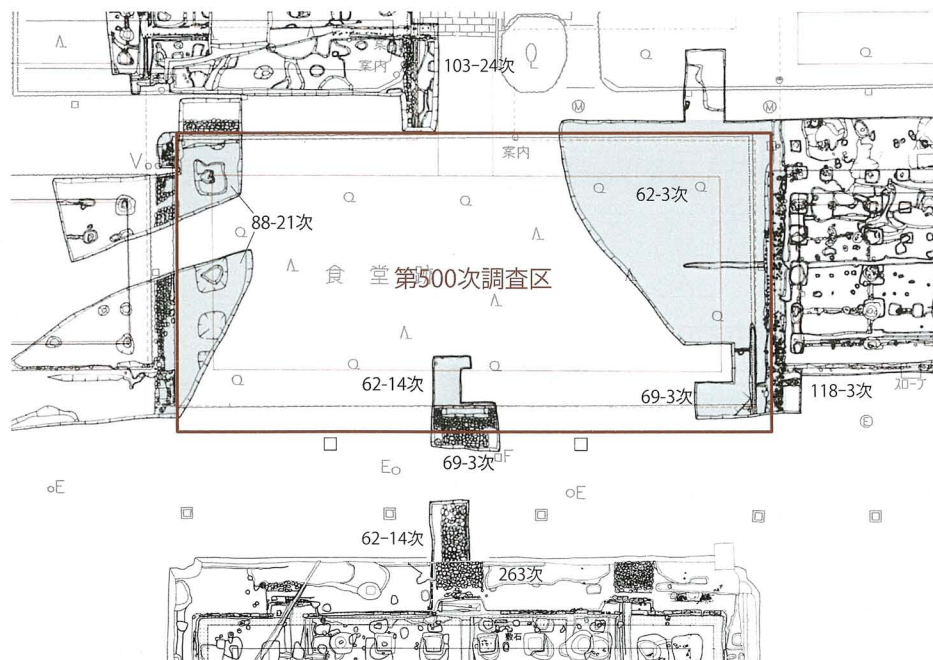
第2図 『伽藍寺中并阿弥陀山之図』(部分)

起』と同じ桁行11間、梁行4間の瓦葺建物だったことわかる。以後は食堂に関する文献史料はみあたらず、いつまで存続したかは不明だが、延宝2～4年（1674～1676）の作とされる『伽藍寺中并阿弥陀山之図』や元禄2年（1689）の伽藍絵図など、江戸時代の絵図には食堂が描かれていない。代わりに食堂の位置には、南北の参道が設けられている。したがって、遅くともこの頃までには廃絶していたと考えられる。なお、この南北の参道は、1969～1974年の発掘調査まで参道や生活用通路として踏襲されてきた。今回の調査でも、参道があった基壇中央部は基壇土の残存状況がよく、路面と考えられる固く締まった面も土層で観察できた。長年通路として利用されてきたため、後世の耕作などにもなう削平を免れたと考えられる。

（2）既往の調査

食堂は、1968年から実施された薬師寺伽藍復興計画にともない、1969年（第62-3次）、1970年（第62-14、69-3次）、1974年（第88-21次）の4回にわたり部分的な発掘調査がおこなわれている（『薬師寺報告』）。これらの調査のなかで、第62-3次、62-14次、69-3次調査は薬師寺伽藍発掘調査団の手によるもので、それ以後は奈良国立文化財研究所（2001年の独立行政法人化により奈良文化財研究所）によるものである。

遺構は、第62-3次調査で基壇東南隅の地覆石の一部を発見したのを皮切りに、翌年の第62-14次調査では南面の中央階段部分と講堂に向けて南に延びる石敷の参道が検出された、また、基壇北面西寄りの地覆石、および石敷や石組雨落溝の一部が検出され、部分的ではあるが基壇とその周辺の状況が明らかになった。第88-21次調査では、食堂西側柱列の礎石下地業と礎石抜取穴を検出し、一部では礎石根固め石も残存すると報告された。これらの調査成果から、食堂は桁行11間、梁行4間の礎石建物で、桁行総長は140尺、柱間寸法は中央間のみ十字廊の柱間に合わせて15尺、その他は12.5尺等間、梁行は総長54尺で身舎2間は14.5尺、廂12.5尺と復元され、『縁起』に記載された食堂の規模にほぼ一致するとされた。また平安時代の瓦が少量ながらも出土することから寛弘2年（1005）に再建された可能性が高いとされているが、再建を示す明確な遺構は確認されていない。



第3図 今回の調査区および既往の調査位置図（1：500）